

特集 激変する世界と観光の現在

観光のあり方は多様化している。これまで別の文化現象だったものが「観光」という文脈に包含され、これまで「観光」のなかで語られてきたものが、地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

「観光」という文脈に包含され、これまで「観光」のなかで語られてきたものが、地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

動く世界と止まる世界

福井 栄二郎
島根大学准教授

——ヴァヌアツ、クルーズ船観光の事例とともに

コロナによって止まる世界

社会学者のJ・アーリーは現代社会のあり方を「移動」という観点からとらえなおそうとしている。つまりわたしたちは、もはや土地や領土に固定された存在ではなく、常に移動を前提にしている。

もちろん人だけでなく、モノもカネも情報も移動する。こうしたさまざまなものが絶えず流動するなかで社会が再編成され続ける。観光は、この現代社会のあり方を示すもつとも象徴的な現象だとされた。

ところが二〇二〇年初頭から拡大した新型コロナウイルスの影響で、観光産業は未曾有の危機に直面している。七月に発表された国連世界観光機関（UNWTO）による報告書では、二〇二〇年一月～五月までの国際観光客数は、前年同期比で五六パーセン

ト減少したという。これは、三億人の観光客と三二〇億ドル（約三四・二兆円）の流れを失ったことを意味する。また五月の国際観光客数に限定していえば、前年同月と比較して九八パーセントの減少である。

コロナが世界を変えたといわれるが、アーリーのひそみに倣うと少し修正が必要だ。これまでだって世界は常に変化し続けていたし、わたしたちはその流れと波に否応なく乗っていた。むしろ、その動きを止めたのが新型コロナウイルスの拡大



アネイチウム島沖に停泊している観光船（2018年）

だった。わたしたちは移動をやめることで、逆説的に、いかに移動に依存していたのかを知ることになったのだ。

観光船がやって来て、そして来なくなった

わたしがこれまで調査してきたのは、南太平洋のヴァヌアツ共和国、アネイチウム島である。ヴァヌアツの最南端にあり、人口は九五〇人ほど。人びとは自給自足的な生活をしており、島には電気もガスもないし、当然、観光ホテルもない。しかしこんな島にも観光客はやって来る。それも大型のクルーズ船で、一度に二〇〇人以上が、海の



海水浴を楽しむ観光客（アネイチウム島、2013年）

向こうから（多くはシドニーから）やって来るのである。アネイチウム島の南西沖に、サンゴ礁の小島が浮かんでおり、観光客はここで一日、海水浴やアトラクションを楽しんで、夕刻には別の停泊地へと向かう。

ここ数年、この観光船の往来が増えたことで、島がざわついている。一方には観光客の落とす現金で、生活が豊かになったと喜ぶ人がいる。そして他方には、多忙になったためこれまでのような生活ができず、激変する日常を嘆く者がいる。いずれにせよ、頻繁にやってくる観光船は島の生活を少なからず変え、島民たちを混乱させた。

そして今回のコロナ禍は、太平洋の小島で暮らす人びとの生活にも降りかかった。今年三月、オーストラリアを出港したクルーズ船のなかに陽性反応を示した観光客がおり、停泊地だったアネイチウムも感染が疑われた。多くの島民が検査の対象とされ、結果が出るまでの数週間、島は完全にロックダウン状態となり、外部との接触が絶たれた（結局、島民に感染者はいなかった）。

クルーズ船観光再開は、早くてもクリスマスシーズンのようだ。しかも来航回数は大幅減が予想される。現金に依存し始めた生活が、また急激に変化することになる。彼らは定着しつつある観光業を取り戻すのか、それともそのリスクゆえに手放すのか。今後も注意深く調査する必要がある。

観光の現在とこれから

これまでも観光は常に変化のなかにあった。人



観光客向けに売られているおみやげ品（アネイチウム島、2018年）

類学ではおなじみの議論なのだが、観光文化は決して変化を拒むものではなく、むしろ近年に創られたものであることが多い。あるいはそれまで観光とは無縁だった場所が、観光地化されるということも頻繁に起こっている。ドラマや映画、アニメの舞台になれば、とたんに「聖地巡礼」の観光客が押し寄せる。また数年に一度おこなわれる芸術祭は、なんの変哲もない地域コミュニティを、そのまま巨大な観光地へと変えてしまう。

本特集では、世界各地の観光地の現状を報告する。どの場所も、人とモノと情報のフローのなかで変化し続けており、各執筆者はその流れの一瞬をとらえ、詳細に記述している。変化を引き起こすのは、何もコロナウイルスだけではない。繰り返すが、観光地は移動と変化の中継地点である。そこに一歩足を踏み入れるだけで、わたしたちは現代社会のあり方そのものを目の当たりにすることができらるだろう。



アネイチウム島沖の小島にタグボートで上陸する観光客（2013年）

ビーチリゾートの観光化と脱観光化

——フィリピン、ボラカイ島の開発と汚染

東賢太郎
名古屋大学准教授

世界一のビーチ

フィリピンのボラカイ島は、二〇一二年にアメリカの『トラベル・アンド・レジャー』誌で島部門一位に選ばれたこともあるビーチリゾートである。全長四キロメートルの白い砂浜、青い海と立ち並ぶヤシの木、ビーチから望む眼前に沈む夕日などの美しい自然環境と、適度に制限されながらも十分に開発された施設や設備の両立が、ボラカイの魅力である。

観光開発と環境汚染

しかし二〇一〇年代に入り、世界的な知名度を獲得し観光客が増えると、観光開発も急速に進行し、自然環境が目に見えて悪化するようになってきた。環境汚染の象徴としてよく引き合いに出されるのが、異常発生した緑の藻である。人びとは緑の海のなかで藻に絡まりながら泳ぐことを余儀なくされている。

それに対して講じられるゴミや排水の規制といった対策は、ホストにもゲストにも抑圧的に作用し、何よりも急速に増加する観光客数とそれともなう開発には到底追いつかなかった。ボラカイ



ボラカイ島のビーチに異常発生した緑の藻 (2017年)

イ島の人口は三万二〇〇〇人程度、それに対し二〇一八年度は年間二〇〇万人以上の観光客が国内外から押し寄せたのである。

閉鎖と再開、そしてコロナウイルス

ボラカイ島での環境汚染の進行に対し、国内メディアで観光客数規制についての議論が聞かれはじめた二〇一八年には、ドゥテルテ大統領が島を訪れ、「ボラカイは汚水溜めだ」と発言した。それでも十分な対策が講じられないことに業を煮やした大統領は、同年四月から一〇月まで、前代未聞の半年間の島の閉鎖を決定した。

閉鎖中、観光はストップし、環境保全のための大規模な工事や改修がおこなわれた。当初は地元から強い反対を受けた島の閉鎖も、半年後の再開時には自然環境の大幅な改善によって肯定的に評価され、さらには今後も同様に、断続的な閉鎖による持続可能な観光開発を望む声も聞かれる。

そんな激変の渦中に生じたコロナ禍による観光の停止は、ボラカイをさらに不安定な状況に陥れた。島に残る観光従事者は今、観光化と脱観光化の狭間で揺れながら、外出や海水浴が禁止された人気がない美しいビーチの前に、いつになるかわからない再開を待ち続けている。

かりそめの観光、ゆきずりの

シージプシー

国士館大学講師

鈴木佑記

「アンダマン海の真珠」
アンダマン海に浮かぶブーケット島は風光明媚な地として知られ、タイを代表する観光地のひとつである。同地には国内外から観光客が集まり、彼らの一部はここを拠点として近海に浮かぶ島々を観光する。

例えば、映画「ザ・ビーチ」の舞台となったマヤ湾があるピピ諸島は東方に浮かび、シュノーケリング・ポイントとして注目されつつあるスリン諸島は北方に位置している。これらの島々では、多額の出費が伴うマリン・ツーリズムが観光を浴びる一方で、少数民族の村落を訪問するというエスニック・ツーリズムも同時にひっそりとおこなわれてきた。

一方通行の観光形態

ブーケット島周辺の島々には少数民族のモーケン人やウラク・ラウオイット人がおり、タイ語とは異なる言語を母語とする。かつては船を住まいとして、海を移動しながら暮らしていた漁民であった。そのような生活形態からシージプシーとよばれることがあるが、現在は定住している。それでもなお彼らの村落は、道路上の看板や地図などを通じてシージプシー村として流布しており、観光客がやって来る。他方で少数民族側も自ら



バスでシージプシー村を訪れる中国人団体観光客 (2016年)

「シージプシー」の記号を用いて、土産物や魚介類を観光客に販売しようとしている。

タイを訪れる観光客のなかでも、二〇一五年度ごろから急増し、島嶼の各地で存在感を強めているのが中国人である。バスやボートに乗って各地のシージプシー村に団体で訪れ、村をそぞろ歩きし、そこかしこで自撮りしたあと、そそくさと別の場所へ移動する。たいていの観光客はシージプシーの販売物には見向きもしない。つまりここでのエスニック・ツーリズムは、観光客が一方的に彷彿し、記念撮影することで完結している。現地に経済的恩恵はほとんどもたらされていない。こうした地元の利益を無視した観光形態は以前より問題とされてきた。

観光の転換期

そこでスリン諸島では、シージプシーがシュノーケリングの案内役となり、現金収入を観光客から直接得られるようなコミュニティ・ベースド・ツーリズム(CBT)に着手したが、認知度が低いためか、まだ利用客は少ない。そしてこのコロナ禍である。島は観光客に閉ざされたままだ。これまで一時的であれ観光客との交流があったシージプシーだが、今まさに観光の文脈から離れるという転換期を迎えつつある。



CBTでモーケンの伝統的な船に乗りシュノーケリングをする観光客 (2010年)



シージプシーをアピールする魚介類販売店 (2016年)

観光と支援の結節点としての

民族文化観光

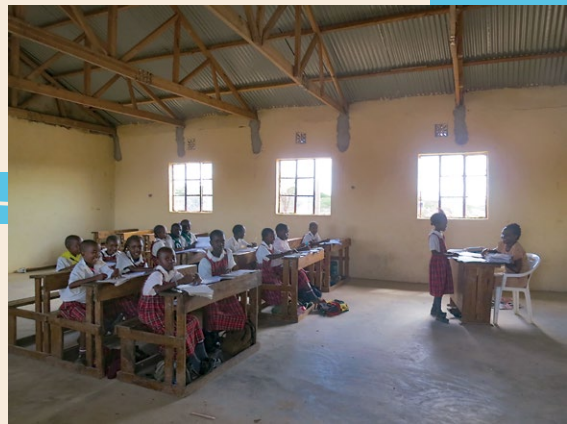
なかむら まさこ
中村 香子
東洋大学准教授

「文化観光村」の現状
「マサイ」に代表されるケニアの牧畜民は、近代化を拒絶する「伝統的」な人びとと位置づけられ、「観光のままざし」の対象となってきた。観光客が多く訪れる野生動物保護区周辺に居住する牧畜



ケニアの「文化観光村」では、男性が披露するダンスには観光客も参加できる。(2016年)

民は、主体的に「文化観光村」を作り、ダンスを披露し、ビーズの装身具を販売している。観光客はここを訪れば、アフリカの原野で「伝統的」に生きる牧畜民に出会うことができる。しかし入村料と装身具販売による収益は著しく限られており、観光は牧畜民の生活を支える基盤となるにはほど遠いのが現状である。



観光客の支援で建設された小学校(2016年)

特に、社会的弱者とされる子どもと女性の姿はメディアでもよくとりあげられており、この取り組みは、ダークツーリズム(戦争、災害、貧困などといった「影」を対象とする観光)やスタディ・ツーリズムといった新しい観光の潮流にもマツチする。そして、ごく稀なことであるが、これが学校建設や井戸作りへの寄付といった大きな支援につながることもある。「文化観光村」は観光と支援を結びつける舞台となりつつあるのだ。

観光とのゆるい繋がり

人びとは、観光業の「ひよっとすると利益を生むかもしれない」という可能性を評価しつつも、過度に期待せず、ゆるい繋がりを持っている。彼らはこれまでに、テロや内戦、 Ebola 出血熱などの経験をとおして、一瞬にして消えてしまう観光客とのつきあい方を学んできた。コロナ禍の現在は、牧畜に専念しているか、もしくはまったく別の、新しい可能性を見つけ出しているにちがいない。

「光」と「影」の利用

そんな「文化観光村」に、近年、ひとつの変化が見られるようになった。人びとはダンスを見せたあと、就学前の子どもに歌をうたわさせて学資のスポンサーを募ったり、女性は各自がおかれている状況の「ストーリー」を語ることを始めたのだ。「ストーリー」は、しばしば貧困、児童婚、家庭内暴力といった、開発プロジェクトが用いるキーワードを含んでいる。

大自然のなかで「伝統的」に生きる牧畜民の姿が、アフリカの「光」を象徴するステレオタイプのひとつであるならば、貧困や就学率の低さは、アフリカの「影」を象徴するもうひとつのステレオタイプである。

アートツーリズムと創造都市

フランス、ナント市の芸術祭と地域振興

おちいくの
越智 郁乃
東北大学准教授

芸術祭と都市再開発

パリから高速鉄道で二時間のナント市では、二〇二二年から毎年、バカンスの時期になると芸術祭「ボーージュア・ナント」(以下「ナントへの旅」)が開かれ、旧市街地や郊外の再開発地に大胆な現代アート作品が出現する。一昨年の目玉は旧市街の歴史的な噴水を用いた作品で、噴水が外に飛ぶように改変され、わたしも直撃を受けた。こうした「遊び心」のある作品が都市に組み込まれ、建物自体が作品であるものや宿泊できる作品もある。「ナントへの旅」はこうした文化資源に観光客だけでなく住民をも誘導してその場所の再解釈を促



1598年に「ナントの勅令」が発せられたブルターニュ公爵城の城壁に取り付けられた作品《滑走する風景》(Tact architects & Tanguy Robert作、2017年)。滑り台からは普段見ることができない視点で堀や城壁、街の風景を見ることができ(2018年)

し、都市を創造し続けている。

文化芸術政策による経済復興

一八世紀の奴隷貿易による舟運業で発展したナントは、一九八〇年代に造船所が閉鎖され、経済的に衰退した。市は経済発展の梃入れとして文化政策を押し進め、アートの展示やクラシックコンサートなど、大規模な文化芸術イベントを公共空間で開催することを奨励した。会場として用いられたのが、旧造船施設や工場などの過去の遺産で

ある。そこに大道芸集団ロワイヤル・ド・リュクスを誘致し、機械仕掛けのアトラクションを備えた公園マシンド・リルをはじめ、文化施設を次々と展開。再び人びとを集めることであらたな都市を構想してきた。その動きのなかで始まった「ナントへの旅」は、観光政策の一環としておこなわれている。二〇一〇年と比較すると二〇一七年には宿泊者数六四パーセント増、夏季の夜間営業店舗数七七パーセント増、夏の訪問客数六七万人(ナント市人口は約三〇万人)となり、地域経済への貢献が認められる。一方で、「観光客が増えすぎた」という否定的な意見や、今年、新型コロナウイルス感染症が拡大してからは「街が住民の手に戻った」という声もあると聞く。

「旅」は誰のもの？

フランスでは一九六八年の五月革命を経て、経済的に平等な社会を求める声が高まり、また地域文化を振興する運動が起こった。ミッテラン政権以降、地方分権化と文化予算の拡大が進み、文化と経済を結びつけた政策が展開された。その根底にあるのは、誰もが文化芸術を享受できる社会を目指す「文化の民主化」である。こうした考えを基に再度ナントの芸術祭について見直すならば、「ナントへの旅」は誰のものか」ということが問われているのではないだろうか。



旧造船所を用いたマシンド・リルのアトリエと機械仕掛けの巨大な象。マシンド・リルでは、ナント生まれの作家ジュール・ヴェルヌの世界観を表現したマシンが体験できる(2018年)

神になる旧日本軍人、

それを訪ねる日本人

藤野 陽平
北海道大学准教授

台湾の鬼と日本の鬼

台湾では「鬼」という存在がいとされている。日本の「オニ」ではなく、台湾語で「クイ」とよばれるもので、正しく祀らなければ祟りをなす、恐ろしい亡霊のようなものを意味する。天寿をまっとうせず死んだ者は鬼として地獄に落ち、その恨みからこの世に祟りをなす。ただし、鬼は永久に鬼なのではなく、正しく祀られるうちに、福をもたらす下級の神になることもある。

台湾で戦死した旧日本軍人は彼らを祀る家族がないので、鬼となってしまう。この旧日本軍人の祟りを避けようと、彼らを神として祀る施設が存在する。多くの場合、それは小さな祠であり、墓場などの不吉とされる場所に位置していたりして、訪れる人はほほえないのだが、なかには実在の人物を祀り、地域で信仰を集めている場所もある。

親日か民俗宗教か

こうした場所は、近年インターネットを中心に、

マスメディアやガイドブック等で取り上げられ、「親日的な台湾では旧日本軍人が神として崇められている」と勘違いをして訪問する日本人が増えている。以前は保守的な思想に共感する人が中心であったが、近年は幅広い層へと広がりを見せている。問題はこうした言説が、背景に存在する民俗宗教の価値観に触れることはなく、親日台湾言説にのみ基づいて作られている点である。

旧日本軍人を祀る施設は、いわゆる観光地とは異なり、広く台湾人が参拝するような場所ではない。鬼を恐れつつも、その強烈な力を頼りとする台湾人信者たちと、それを親日的だと勘違いして感動する日本人観光客らは同床異夢に陥っている。それでも、あらかじめ定められたコースを巡るバックツアーが主流であった時代には見られなかった、あらたなコミュニケーションが、彼らのあいだに生じていると評



台南市の慶隆廟(けいりゅうびょう)に祀られる吉原元帥(前列右、2019年)

価できるのかもしれない。今後こうした場所がステレオタイプを強化する都合のいい場所ではなく、そこに暮らす人びとの知恵を学ぶフィールドとなることを願うばかりである。

止まらなかつた世界のいくつもの片隅に

——精神的移動から考えるこれからの観光

岡本 健

近畿大学准教授

止まらなかつた世界

新型コロナウイルスの感染を予防するために、人の移動や集まりは避けられるべきこととなった。すなわち、これらの経験が商品化されたものといえる観光産業は大ダメージを受けた。一方で、止まらなかつた移動、むしろ、以前よりも活性化した移動があった。それは、情報空間や虚構空間への「精神的移動」だ。

現実空間上の人の移動や集合を前提とした各種の取り組みは軒並み中止を余儀なくされたが、定額制(サブスクリプション)でのコンテンツ配信サービスやデジタルゲーム、アナログゲーム、プラモデルなどの身体的移動を伴わずに刺激を得られる遊びは止まることなく、その利用はむしろ好調であった。このような世界で、これからの観光はどうなっていくのか。

「精神的移動」も包摂した観光へ

わたしはこれまで、アニメ聖地巡礼について研究してきた。アニメの背景として描かれた場所をファンが探し出し、その情報はネットを通じて情報空間に発信され、後続のファンはその情報を頼

りに現地を訪れる。例えば、上の写真は佐賀県唐津市にある旧三菱合資会社唐津支店本館(唐津市歴史民俗資料館)なのだが、二〇一八年に公開されたテレビアニメ「ゾンビランドサガ」の舞台となり、ファンが一目見ようと訪れるようになった。そもそもこの行動はアニメという物語の世界、すなわち、虚構空間を体験することから始まっている。アニメ聖地巡礼は、コンテンツを体験するという、物語の世界への精神的な旅からスタートしているといえる。このように考えると、そもそもすべての観光で、現地に行く前になんらかの精神的移動が生起し、それによって身体的移動が駆動されていることに気がつく。

バーチャル・リアリティなど、人間の精神的移動をサポートする技術が普及し、かなり安価でその成果を享受できるようになってきた。現実空間上の移動に意味がないなどというつもりはない。ただ、今、このとき、人間にとっての観光の意味を考へるなら、身体的移動と精神的移動のそれぞれを今一度つづきに見つめ直すとともに、それらのかかわり方について考察を深める必要があると思うのだ。



「ゾンビランドサガ」の聖地「旧三菱合資会社唐津支店本館(唐津市歴史民俗資料館)」(2019年)